



ブラジル連邦共和国

派遣期間 2013 年 4 月～2016 年 3 月

マナウス日本人学校 帰国報告

登別市立登別小学校

校長 片倉 徳生

1. はじめに

私はブラジル連邦共和国アマゾナス州マナウス市にあるマナウス日本人学校に 3 年間派遣され、国内では経験できない貴重な実践を積むことができた。任期中に知り得たことや経験したことのほんの一部となるが、ブラジル連邦共和国や州都マナウスの概要、そしてマナウス日本人学校の概要と特色ある教育活動、マナウス市の治安とそれに対する危機管理体制について報告する。

2. ブラジル連邦共和国 アマゾナス州 マナウス市の概要

(1) ブラジル連邦共和国の概要

ブラジルは、1500 年 4 月 22 日、ポルトガル人ペドロ・アルバレス・カブラルが既にヴァスコ・ダ・ガマが発見していた喜望峰まわりの航路を使用しインドに向かっていた際、偶然途中で航路を西南にとったことにより発見された。ブラジルという国名は、染料となる樹木として当時ヨーロッパで珍重されたパウ・ブラジルが、この国に沢山繁茂していたところに由来している。

ブラジル連邦共和国（以下、ブラジル）は 5 つの地域に分かれ、それらの地域は 26 の州と 1 つの連邦直轄区（首都ブラジリア）から構成されている。その 26 州の中でマナウス市はアマゾナス州に属し、その州都でもある。ブラジルの国土面積は 851 万 1965km² で世界 5 位（日本の約 22.5 倍）であり、人口は 2 億 44 万人（2015 年人口統計）に達している。

日本との外交関係は 1908 年 6 月の集団移民、いわゆる笠戸丸移民がサントスに入港したときから始まった。1950 年代に日本政府の後援による移民が停止されるまでにブラジルに渡った日本人移民の子孫は 5 世、6 世の世代になり、サンパウロの世界最大級の日本人街“リベルダーヂ”を中心に海外で最大の日系人社会（約 150 万人）を形成している。この日系ブラジル人は政治や経済などで高い地位につくものも多い他、特に「農業の神様」と言われるくらい長年の農業における高い貢献により、ブラジル国内において日本人に対する信頼度も非常に高い。さらには、トヨタ、コマツ、ソニー、パナソニック、東京海上日動など、重工業から金融、サービス業や運送業に至るまで、様々な業種の日本企業がサンパウロを中心に数百社進出し、さらには経済特区マナウス市においてもホンダ、ヤマハなどの二輪業界を中心に 40 社近い日本企業が工業団地を形成している。



(2) マナウス市の概要

マナウス市はアマゾンの中中部、ネグロ川、ソリモンエス川との合流地点の 15km 手前、南緯 3 度 8 分、西経 60 度 1 分の地点に位置している。アマゾン川河口から約 1,500km の内陸にありなが

ら、海拔はわずか 93m に過ぎない。また、この町は 17 世紀にポルトガル人がアンデス山脈を越えて侵入してくるスペイン人の侵略を防ぐために、ネグロ川左岸に要塞を建設したのが起源である。18 世紀に入ると、カカオ、コーヒー、ナッツ、タバコなどの採集産業が盛んになり、その集積地として発展し、「マナウス村」と呼ばれるようになった。19 世紀に入り市に昇格した。

マナウス市はブラジル北西部最大の都市で人口は、ブラジル地理統計院人口推計によると 206 万人である（2015 年）。年々増加傾向にある。地理的にはブラジル国内の主要都市へは空路あるいは水路以外に交通手段がなく、陸の孤島である。国内の主要都市までの直線距離は、ベレン約 1,300km、首都ブラジリア約 1,930km、サンパウロ 2,680km、リオ・デ・ジャネイロ約 2,845km である。



気候は、年間降雨量 2,500mm を越える高温多湿の熱帯サバナ気候である。乾季（比較的雨の少ない時期：6 月～9 月）と雨季（雨の多い時期：12 月～3 月）の 2 シーズンあり、4 月と 5 月は雨季から乾季への、また、10 月と 11 月は乾季から雨季への移行期として位置付けられている。

（3）マナウス市の治安状況

アマゾナス州公安局の犯罪統計によれば、ブラジル国内経済の悪化などもあり、平成 27 年の犯罪認知件数は前年比で 14.7%増加した。犯罪別に見ても、マナウス市における殺人事件は日本の約 65 倍、強盗に至っては日本の約 788 倍も発生している（10 万人当たりの発生件数 日本は平成 25 年犯罪件数と比較、下表のとおり）。また、日本人学校のある Cidade Nova 地区、マナウス日本総領事館のある Adrianopolis 地区を含めて、確実に安全であるという地区はなく、安全対策は日本人学校の校舎移転で解決できる問題ではない。特に、平成 27 年 9 月には日本人学校周辺において、麻薬に関連する殺人事件が一週間に 3 件発生するなど、麻薬をめぐる凶悪事件に対する安全対策が喫緊の課題であった。

	マナウス (200 万人)	日本 (12552 万人)	備 考
殺人の件数	988	938	日本の約 65 倍
10 万人当たりの発生件数	49.0	0.75	
強盗の件数	41,768	3,328	日本の約 788 倍
10 万人当たりの発生件数	2,088.0	2.65	
強姦の件数	706	1,410	日本の約 35 倍
10 万人当たりの発生件数	35.0	1.1	

【出典】

- ・マナウスの犯罪件数：アマゾナス州公安局
- ・日本の犯罪件数：警察庁「平成 25 年犯罪統計資料」

3. マナウス日本人学校の概要と特色ある教育

（1）マナウス日本人学校の概要

本校はマナウス日本文化振興会（以下、振興会）を運営母体として、昭和 58 年に文部省より認可を受け、補習校から「マナオス日本人学校」として開校した。開校当初は、児童生徒数が全日コース（日本からの駐在員子弟）のみの 30 名程度であった。平成 5 年度には日本文化コース

(ブラジル国籍の日系人子弟)が開講し、全校児童生徒数が40名を超える規模になった。現在は、両コース併せて30名前後の児童生徒数で推移している。日本文化コースの児童生徒は、保健体育、図工(美術)、音楽、書写の授業とすべての学校行事を全日コースの児童生徒とともに活動している。毎日3時間目まで日本人学校で学習し、午後に現地ブラジルの学校に通学している。これはブラジルの学校のほとんどが半日制であるため、このようなことが可能となっている。

また、振興会は当地に進出している日本企業27社から構成されている。本会には、在マナウス日本国総領事館の日本人学校担当警備官と、マナウス日本人学校の校長が顧問として参画している。この会は理事と維持会員(賛助会員)とに分かれ、企業負担金をいただき運営資金としている。この運営資金に加え、保護者からの入学金並びに授業料、スクールバス利用料金をもって日本人学校の運営資金となっている。実際に経理を任されているのは、日本人学校の校長、担当教員、事務職員の3名である。その3名により学校予算の策定、並びに月々の収支決算を行い、理事会での承認を得て、予算を執行している。校舎が老朽化している中で、いかに計画的に校舎営繕や物品購入を進めていくかが、大きな学校経営課題であった。

学校所在地はマナウス市郊外にある自然豊かな日系人移住地の中にあり、マナウス市の中心から車で20分くらいのところに位置し、周囲には日系の方々の農場があり、野菜や果物が栽培されている。学校の裏手にアマゾン地域特有のジャングルが広がり、時折ナマケモノやイグアナなどの珍客も学校に訪れる。また、校舎敷地内は周囲を有刺鉄線で囲まれており、外部からの侵入を防いでいる。

(2) 特色ある教育活動

長さ流域面積世界一のアマゾン川に面したマナウス市に日本人学校があって、アマゾン川流域の広大な大自然を生かした教育活動が展開されている。マナウス日本人学校の三大学校行事を中心に紹介する。

① 大運動会(三大学校行事)

日本人学校と日本企業21社(平成27年度)が合同で開催する運動会で通常の競技や応援合戦の他に演技種目で現地に定着している「ボイダンス」を発表している。この踊りは、毎年6月にマナウス市近郊のパリンチンスという町で行われている伝統舞踊である。日本企業も赤団と白団に分かれて競い合う。特に、企業対抗リレーは企業の名譽を背に応援も白熱した中で実施される。日本企業では福利厚生も兼ねているので、早朝よりグラウンド一杯に現地料理のシュハスコの匂いが漂う。



② アマゾン体験学習(三大学校行事)

船2隻(1隻はホンダ社所有)を貸し切り、日系人が経営するアマゾン川プライヤに出かける。そこで水遊びやレクリエーションを行い、アマゾンの豊かな自然に触れる。宿泊は船上となり、ヘッジ(ハンモック)と蚊帳を各自で張り船の明かり以外は全くない、まさに暗闇の世界の中で眠る(但し、低学年の児童はホンダ社所有の船内で寝る)。子供たちにとっては日本国内ではでき



ない貴重な経験を積むことができる。実施に当たっては事前に3度下見を行うなど、害虫やプライヤの状況をたえず確認しながら万全を期している。尚、修学旅行実施の年は日帰りとしている。

③ 学習発表会（三大学校行事）

11月に高学年（5年生以上）と低学年（4年生以下）に分かれて発表会を行っている。高学年はよさこいソーラン、低学年は演劇、そして全校で合奏合唱を行っている。その他に、現地交流校をはじめとする他団体による演目を西部アマゾン日伯協会所有の会館ホールで実施し、現地との文化交流という面で大いに盛り上がりを見せている。



④ 修学旅行

三年に一度、5年生以上の児童生徒を対象に修学旅行を実施している。首都ブラジリアを中心に二泊三日の日程である。平成26年度実施の修学旅行ではサンパウロ日本人学校6年生と日程が重なったこともあり、一泊目の宿泊先を同じホテルにすることで交流を図ることができた。極小規模校の本校にとっては、またとない機会に恵まれた。児童生徒は互いの学校の紹介をしたり、趣味や出身地の話をしたりと強く興味関心をもって交流を深めることができた。

⑤ 水泳記録会

25m プールを有し、熱帯の気候という環境を生かして、年間を通じて、週1時間水泳学習を実施して体力づくりの一環として取り組んでいる。その水泳学習の集大成として9月に水泳記録会を行っている。普段の学習の成果を発揮して当日は自己記録を更新したり、学校・学年新記録を更新したりする児童生徒も多くみられ、大きな自信となっている。



⑥ マラソン大会

これも体力づくりの一環として12月に実施している。西部アマゾン日伯協会が経営しているマナウスカントリークラブの敷地内で、日中30℃を超える中で行っている。コンクリート塀や有刺鉄線を囲まれた安全性の高い場所であるが、当日は多くの保護者にも監察や警護の手伝いしてもらい万全な安全対策をとって実施している。中学部はどの生徒も3kmを走りきるが、誰一人として熱中症に罹ることはなかった。

⑦ 西部アマゾン日伯協会（以下、日伯協会）行事への参加

マナウス市周辺には26,000人ほどの日系人が居住している。日系人は日本の文化伝統を懐かしむとともに、コミュニティとしての結束力も強い。その中で日系コミュニティの運営母体となる日伯協会とも深くつながっており、校舎敷地も日伯協会から借用している。その地域貢献として日伯協会主催の敬老慰安会に本校児童生徒が出演している。大運動会で披露したボイダンスをお年寄りの方に楽しんでいただいている。お年寄りと直接関わることのできるこの機会は、現地日系人と本校児童生徒が心の共有のできる貴重な体験となっている。

⑧ 現地校との交流

日本人学校近隣に日系人が経営するキリスト系の私立学校がある。この学校はカリキュラムの中に日本語や柔道などの日本文化を学習する選択授業を取り入れている。ほとんどの児童生徒はブラジル人であるが、一部日系の児童生徒も含まれており、日本に対する興味関心の高い学校である。年3回の交流学习を行っている。



- ・第1回目…日本人学校での体育（水泳），国語（書写）
図工などの授業体験。
- ・第2回目…ジョゼフィーナ・メーロ校での科学作品展見学。
- ・第3回目…ジョゼフィーナ・メーロ校でのレクリエーション交流。

いずれの交流もグループに分かれた児童生徒主体の交流であり、ポルトガル語を使い意思疎通を図るという取組である。ただ、3回という限られた交流ということもあり、交流の深まりがみられてなかった。そのため、平成27年度からは日本人学校と現地校の間で児童生徒同士が、手紙のやり取りをすることとした。交流を通しての感想，互いの国の文化伝統や自己紹介などをポルトガル語，英語，日本語で書き，不定期ではあるが交換することで互いをより理解し合うことができた。

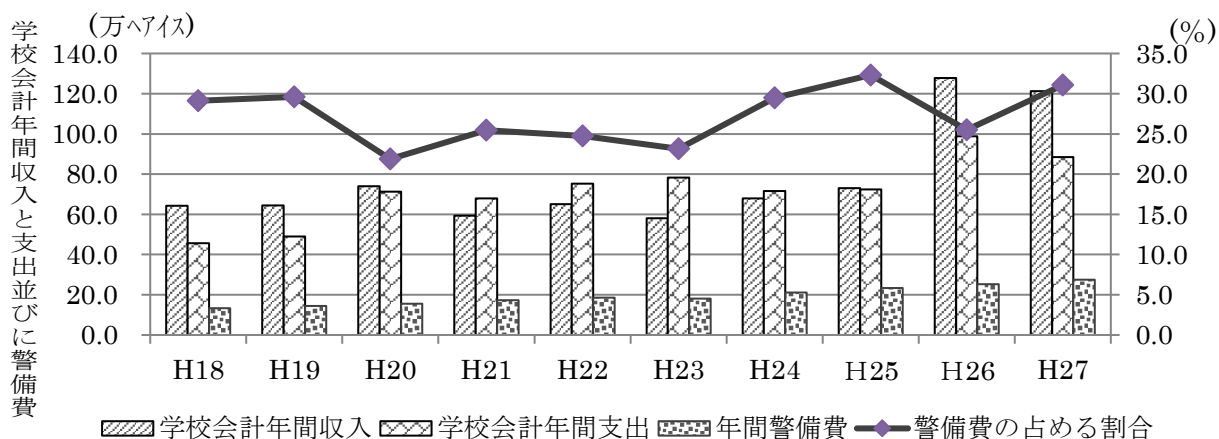
4. マナウス日本人学校の危機管理体制と安全管理の現状

マナウス市における治安状況が悪化している中で児童生徒の安全を確保し，安全・安心な学校環境を維持していることが，学校経営を推進する上で最重要課題と捉え，以下のような取り組みを行った。

(1) マナウス日本人学校の安全対策と学校予算上の課題

学校校内の警備体制は現地総領事館から地元警察に依頼し，ホンダノバイロ（パトカーの大量導入による常時巡回警戒態勢）により学校周辺を定期的に巡回してもらっているが，地元警察官が学校に立ち入り警備をしてくれることはない。

そこで，振興会の指導と支援の下，信頼のおける現地警備会社に依頼し，24時間体制で警備にあたってもらっている（門のポータリアは昼夜各1名で1日交代 計4名）。スクールバスのポータリア1名（勤務時間6時～17時 校内巡視を兼ねる） 計5名配属）。学校会計年間収入や支出、年間警備費並びに年間総支出に対する警備費の割合については下の図の通りである。



ものを値上げしている。折れ線グラフの警備費が緩やかな上昇が見られるように、毎年 10%前後の割合で物価が上がっている。特に、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて学校会計全支出額に対する年間の警備費の占める割合が 3 割以上も占めるようになった。この経費を少しでも軽減するために、平成 25 年度には振興会理事会の承認、並びに保護者の了解を得て、スクールバスに乗車するポータリアの拳銃携帯をやめた。この決定にあたっては総領事館の指導を受け、銃撃戦になった場合の児童生徒の安全確保を第一に考えた結果である。さらには、年間授業料並びにスクールバス利用料金の大幅な値上げにより、学校会計の増収を図った。

(2) マナウス日本人学校の危機管理・安全管理体制

学校における危機管理とは児童生徒と教職員の生命を守ること、事件と事故の管理を適切に行って児童生徒と教職員の信頼関係を維持し深めること、教育活動の正常な運営を行い学校に対する社会的信用や信頼を得ることである。そのために、各種の情報を素早く入手し、必要に応じて在マナウス日本国総領事館、日本国外務省並びに文部科学省の指示を仰ぎ、児童生徒及び教職員の生命の安全と、学校施設・設備の保全に努めることを基本方針とした。

① 平素からの危機管理と緊急時への対応

日本人学校では日頃から、平素の心構えや緊急時の対応の仕方について危機管理マニュアルにまとめ、それに基づいて研修などを通して共通理解を図ってきた。

② 保護者や関係機関との連携の強化と緊急連絡体制の確立

危機発生時に素早い対応を取るためには常に携帯電話を所持して、学校・教職員・保護者・関係機関との連絡体制を整備しておく必要がある。場合によっては、収集した情報を文書により保護者等に知らせ、事件や事故に巻き込まれないように啓発を図ってきた。また、スクールバスとの連絡では同乗者の携帯電話の他に、緊急用の携帯電話を外部に気づかれない場所に常備させ、不測の事態に備えていた。

③ 積極的な情報収集と危機管理体制の確立

教職員に対し日常的に報告・連絡・相談を励行するとともに、想定される危機への対応策を定め、危機管理体制を確立させた。総領事館からの情報はもとより、現地採用教職員、現地日系人、企業駐在員とその保護者などからの様々な情報をアンテナを高くしてキャッチし、危機を未然防止することが重要である（日系人が巻き込まれた事件や事故、デモ、ストライキなど）。「危機は身近にある。特別なことではない。」ということを常日頃から教職員には意識させてきた。

④ 学校施設・設備の定期点検の実施

月初めに“安全点検日”を設定し、全教職員で学校施設・設備の点検、並びに安全確認を行った。○消火栓や消火器 ○緊急放送（不審者の侵入等）○非常サイレン ○非常通報赤色灯（児童生徒に非常事態を伝えるため） ○防犯カメラ ○無線機（総領事館との緊急連絡のため。スクールバスと校長室）など、危機発生時に備えいつでも使用できる状態に保った。

⑤ 組織的で迅速かつ的確な対応のための避難訓練の実施

毎年更新する危機管理マニュアルは使えるものでなければならない。そのため、危機場면을想定した避難訓練を実施し、児童生徒に対しても緊急時の安全な行動の仕方について実地を通して確認させる必要がある。また、教職員にとっても緊急時に児童生徒への的確な指示や迅速な避難誘導等ができるようにするとともに、避難訓練等の結果を検証し緊急時における危機管理体制の

改善を図る必要がある。日本人学校では年 4 回、主に不審者対応の避難訓練を実施した。特に、4 回目については教職員にも抜き打ちで実施し、実践力を養ってきた。

【避難訓練の実施】

○目的 非常事態に対する心構えをもたせ、安全かつ迅速に避難できるようにする。

○時期 ①4 月中旬, ②4 月下旬, ③10 月下旬, ④2 月中旬

○想定 不審な人物が学校敷地内に侵入したため避難する。

ただし、2 回目についてはスクールバスが強盗に襲撃されたことを想定しての訓練。3 回目と 4 回目については、児童生徒へには予告なし。

○事前指導

- ・緊急サイレンが鳴る、赤色灯が点灯したら、「緊急事態である」ということの確認。
- ・緊急サイレンや赤色灯で緊急事態を察知したら、その場にいる教師の指示に従うが、教師がいなかった場合には自分で避難できるようにする。
- ・各教室の鍵を常に扉の内側に差しておくこと。非常時以外は鍵に絶対に触れないこと。
- ・避難の際は、「お・は・し・も」の 4 つの約束守り、安全迅速に避難すること。

(おさない, はなれない, しゃべらない, もどらない)



(3) 危機管理・安全管理を重視した学校行事や諸教育活動の実施

本校は治安状況が悪い中、アマゾン体験学習や遠足などの校外での学校行事も多く、いかに児童生徒の安全を確保しながら、諸活動を実施するかということも最重要課題である。特に、本校の三大学校行事の一つアマゾン体験学習は、「アマゾン河岸での水遊び、レクなどを通して自然に親しむ」をねらいとしており、危険が伴う学校行事だけに以下のような安全対策を行っている。

① 下見の実施

事前に下見を 3 回実施している。活動場所の確認、使用できるトイレの確認、川の水の引き具合、害虫などの発生状況など、その年によって変化したり、派遣教員も入れ替わりが見られたりするだけに、新派遣者も実際に現場に行き確認している(現場までは車でおよそ 1 時間半)。

② 当日のプライア周辺の安全確認・安全確保

○スクールバス(荷物車、緊急用として当日利用)到着時に運転手と校務補が、焚火の残り火や害虫の発生などのプライアの安全確認を行う。船到着後、教員も再度点検する。

○蚊・蜂・蟻・エイへの対策として、事前に安全指導を行う。また、当日は虫除け薬・虫さされ薬は児童生徒に各自持参させる。

○遊泳中はサンダルを履かせる。プライアでの活動などは靴を履いて行う。

○乗船した際、救命胴衣の着用指導を行う。事前に安全指導(川への転落、一人で行動しないなど)をしておく。当日も再度児童生徒には確認する。

○携帯電話は教員全員が携行し、通話可能な場所を確認しておく(母屋付近の丘の上)。

(4) 在マナウス日本国総領事館との連携

安全・安心な学校経営を推進するためには、各関係機関との連携が不可欠である。特に、様々な危機に対応し予防するうえで、現地総領事館とは緊密に連携を取っていくことが大切である。

そのために校長としてメールから配信される治安情報だけではなく毎月定期的に総領事館を訪問し、治安状況など様々な情報を入手する必要がある。また、麻薬絡みの事件が日本人学校周辺で多発していることを受けて、現地警察への安全対策への協力要請も総領事館を通じてお願いした。

① 総領事館からの治安情報の活用

市内の重大事件・事故については、速報としてメールで配信してもらっている。事故・事件の状況、発生場所、留意事項などの情報を得て、学校から保護者にも文書にて周知している。併せて、ストライキやデモが発生した場合、スクールバス運行経路にも支障が出るので、その場合も事前に連絡をもらっている。

《マナウス市内での大規模デモ発生に伴う下校措置 平成 25 年 6 月 20 日》

○理由；ブラジル国内での公共交通機関の料金値上げに反対して。

○総領事館からの情報；午後 4 時よりセントロ地区を中心におよそ 4 万人規模のデモが発生する。デモ発生時と本校の下校時刻が重なる。交通渋滞が予想される。

○措置；6 月 20 日（木）7 時間授業を 5 時間授業にする。それに伴い、下校時刻を午後 4 時から午後 2 時にする。スクールバス出発時刻の変更。6 月 19 日に保護者に文書にて通知。

② 現地警察への協力要請

本校では、現地で生活する日本文化コースの児童生徒も通学している。それだけに現地で生活する児童生徒にとっても、『自分の身は自分で守る』ことを意識させる必要がある。また、マナウス市では子どもを狙った事件や強姦（2015 年統計 人口 10 万人単位で日本の約 35 倍の発生）も多発しているだけに、現地警察官からマナウス市で発生している事件の概要、それらからの身の守り方を学ぶことは児童生徒にとっても参考になる。本校では第 3 回目の避難訓練の時に、日本人学校区を巡回している第 27 軍警の警察官に来ていただき、避難訓練の様子を見てもらい、その後、児童生徒には安全な生活を送るための留意点などをお話ししてもらった。



5. おわりに

年々治安が悪化する中で、何事もなく無事 3 年間職務に専念できた背景には日系移民の存在がある。日系移民の人たちが築き上げた信頼があったからこそ、大きな災難に遭うこともなく暮らすこともできた。また、心温まる日系移民の方々との多くの出会いもあった。盆踊りの時にサンパウロから遊びに来ていた日系の方が、「マナウスに来ると一生の友人ができるよ」と話していた。元アマゾナス日経商工会議所会頭 川田氏からは、「うれしいことも悲しいこともピンガとともにあった。他の酒はもう飽きた。開拓者はどうしてもピンガに戻るよ。」と、ウイスキーのような琥珀色のガラビンを交わしながら、うれしそうに移民当時の苦労話を伺った。起業家の岡氏には、アマゾン川のダイナミックな釣りを堪能させていただいた。様々な日系の人々と関わる中で一生の友人を得ることができた。そして、固い握手とともに再開の約束を交わすことができた。

最後に、安全面を一番に配慮し教育活動をバックアップしていただいた在マナウス日本国総領事館、厳しい学校予算の中で校舎営繕に向けて理解と支援をいただいたマナウス日本文化振興会、そして児童生徒のことを第一に考えて汗を流しながらともに教育に携わった派遣教員並びに現地教職員に対して感謝申し上げ、マナウス日本人学校での 3 年間の報告とさせていただきます。